

幼少期の読書とその効果 —1990年代生まれの女子大学生の場合—

設 樂 馨, 平 井 尊 士
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

The effects of reading during early childhood: A study of women's university students born in the 1990s

Kaoru Shitara, Takashi Hirai

*Department of Japanese Language and Literature, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

Reading is said to be important to the development and education of children. Moreover, fact-finding surveys performed on children are being cited, mainly by various local governments (i.e. boards of education).

This study examines students who hope to become librarians, a profession which connects children with reading, and investigates the context for practicing reading in early childhood. What sort of reading experiences did these students have during early childhood, and what encouraged them to practice reading? This study analyzes the investigation that these students filled out reading experience during early childhoods, from their current perspective as adults, focusing on this context.

Specifically, a descriptive survey was performed on students taking the librarian curriculum at Mukogawa Women's University over the two years of FY 2011 and 2012. The librarian curriculum is taken by about 150 to 200 students in the School of Letters Department of Japanese Language and Literature, and Junior College Division Department of Japanese Language. Students enrolled in the curriculum have a generally positive attitude toward reading. How does an appreciation for books, combined with the primary content and aims of the librarian curriculum, affect the disposition of the librarian?

Differences became clear, corresponding with the development of the students during preschool, lower elementary school, upper elementary school, and onward. For example, a variety of contexts corresponding with development were seen, such as influence from early childhood living situations that conferred on the children a desire to read, contact with family members who encouraged reading, and momentum toward reading imparted by relationships.

In summary, the study confirmed that the richness of early childhood experiences with reading among students in the librarian curriculum is important to their appreciation for reading, encouragement of appreciation for reading in others, and application of reading in learning activities. Finally, based on these results, promotion and enhancements of initiatives aimed at establishing reading during early childhood were proposed.

1. はじめに

(1) 本研究の背景と目的

読書は、「子どもの成長にとって欠かせない大切な営みであり、「言葉の力」を育てる上でも大きな支

えになっている。また、子どもたちの読書習慣を確立させることは、学力を保障する上でも大切な役割を果たしていると考えられる¹⁾と言われて久しい。こうした読書の必要性は、数々の地方自治体(教育委員会)や実践研究者が中心となって読書習慣定着の実態調査や実践報告を行っていることから明らかである。

本学では毎年、約 150 名から 200 名の学生が図書館司書課程(全学共通資格)を履修する*。例えば図書館司書課程において必修で修得する科目「図書館概論」や「児童サービス論」**は、本来の科目の内容やねらいに加えて、読書をすることの重要性とともに「利用者が本を好きになる」、「読書は楽しい」、「他者へも読書を推薦しようという態度」を育成する。

そして、履修学生自身は実際に本が好きであったり、読書を敬遠する人に本の魅力を知ってほしいと思っていたりする者が少なくない。こうした現状は、司書の役割として、科目修得によってそうした態度を醸成する一方、司書課程を修得する以前に、元来「本好き」が図書館司書課程を履修して資格保持者となって読書活動の推進を図ろうとする場合もあると考えられ、実際に授業を通じて学生を観察していると、読書の魅力を認識したうえで、その魅力を広めようという意識が感じられる。そうした学生が図書館司書になり、図書館で利用者に様々なサービスするようになった場合、どのような社会的効果が見込めるだろうか。

そこで、本稿では読書に魅力を感じる感性や読書活動を推進しようとする態度が、学生(図書館司書課程受講生)自身にいつごろからどのように培われたのかを意識調査によって分析し、学生が理想とする子どもたちへの図書館サービス、特に幼少期の児童(就学前や小学校低学年)へのサービスに照らしてどのような効果をもたらしているのか、考察する。

本研究では、学生たちが読書に接するようになった時期を「幼少期」と仮定し、幼少期の読書傾向と読書環境、および、現在のサービス傾向を調査し、幼少期の読書が司書の資質にどのような影響を及ぼしているのか、明らかにしたい。

(2) 方法

2011 年度に「児童サービス論」を履修した 49 名と、2012 年に「図書館概論」を履修した 78 名の計 127 名の学生に、7 回に分けて記述による調査を行った。調査内容は、自分自身の読書経験の振り返りや、現在の児童観、自身が読解した本を児童にどうやって薦めるかの提案などで、本論文に關係する具体的な質問項目は、下記のとおりである(なお、便宜上、質問項目を問 1 から問 5 としているが、実際の調査の時系列はこの並びではない)。

*司書について文部科学省⁵⁾は、「司書は都道府県や市町村の公共図書館等で図書館資料の選択、発注及び受け入れから、分類、目録作成、貸出業務、読書案内などを行う専門的職員です。司書補は司書の職務を補助する役割を担います。

司書・司書補になるための資格は司書講習を受講するほか大学・短大で単位を履修することで取得できますが、司書・司書補として活躍するには当該自治体の採用試験を受けて図書館に配属されないとはいけません。」としている。また、司書の主な職務内容は次の 1 から 6 にまとめられている。「1 図書館資料の選択、発注及び受け入れ 2 受け入れ図書館資料の分類及び蔵書目録の作成 3 目録からの検索、図書館資料の貸出及び返却 4 図書館資料についてのレファレンスサービス、読書案内 5 読書活動推進のための各種主催事業の企画、立案と実施 6 自動車文庫による巡回等の館外奉仕活動の展開など」

**「司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について」⁶⁾の報告によれば、「図書館概論」とは「図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を解説する。」、また、「児童サービス論」とは「児童(乳幼児からヤングアダルトまで)を対象に、発達と学習における読書の役割、年齢層別サービス、絵本・物語等の資料、読み聞かせ、学校との協力等について解説し、必要に応じて演習を行う。」とされている。

~~~~~質問項目~~~~~

- 問1 あなた自身、絵本あるいは本を意識するようになったのは、何歳ぐらいで、どういった理由からか。
- 問2 あなた自身、図書館あるいは図書室を意識するようになったのは、何歳ぐらいで、どういった理由からか。
- 問3-1 幼稚園までに自分で読んだ本・読んでもらった本で印象に残っているものは何で、どういった理由からか。
- 問3-2 小学校低学年までに自分で読んだ本の中で印象に残っている本は何で、どういった理由からか。
- 問3-3 小学校高学年までに自分で読んだ本の中で印象に残っている本は何で、どういった理由からか。
- 問4-1 学校に通うようになってから、読書(活動)が教科学習に役立つとすれば、どういった科目で、どういった理由からか。
- 問4-2 国語、算数、理科、社会等の教科で役に立った本は何で、どういった理由からか。
- 問4-3 司書の魅力について説明している絵本・童話・児童書はどのようなものがあるか。本と、選んだ理由を説明してください。
- 問4-4 教師の魅力について説明している絵本・童話・児童書はどのようなものがあるか。本と、選んだ理由を説明してください。
- 問5 現代の子どもたちの児童観について書いてください。

問1の回答より読書の開始時期を確認する。問1から問3の回答には、成長に即して移り変わる読書の有様が描かれている。そこで、問1と問3の回答から読書傾向を、問1と問2の回答から読書環境を分析する。ここまでを次章「2. 幼少期の読書」で述べる。問4の回答には児童にとって役立つ読書の姿、問5の回答には児童をどのように捉えているかが描かれている。この回答より、児童サービスの傾向を分析して「3. 児童サービス」で述べる。

以上の結果を総合的に考察して、幼少期の読書が児童サービスにどのような効果をもたらしたのか「4. 読書の効果」を述べる。

## 2. 幼少期の読書

### (1) 図書を意識するようになる時期

学生は、いつから図書を意識するようになったのか。問1の回答内容から、図書を意識するようになった年齢についてまとめたものが図1である。年齢は「就学前」「小学校低学年」「小学校高学年」「中学以上」の四段階に区分した。回答の全数は126名である。

図1の分布を見ると、就学前の幼児期に集中している。就学前と小学校低学年を含めて「幼少期」とすると約9割である。多くは、幼少期に図書を意識し始めることが確かめられた。

このころの読書について、回答を読む限りでは読み聞かせが多い。発達心理学の手法を用いた実証研究から「読書の発達過程モデル」を提唱する秋田(1997)でも、「乳幼児期初期」に「読み聞かせという形式による参加」<sup>2)</sup>が位置づけられている。

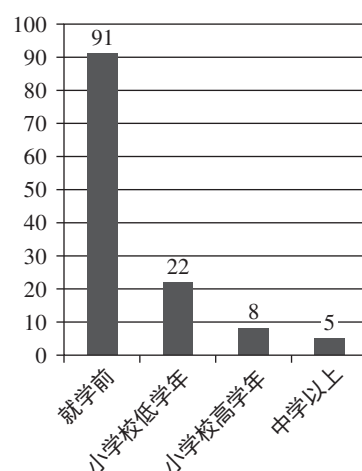


図1 図書を意識するようになった年齢の分布

就学前で文字を習得していない時期の子どもたちは、読み聞かせやお話会に参加する、紙芝居を見るなどの体験から図書を意識する。読む対象としてではなく、周囲のおとなとかかわり合うツールとして、図書を意識するのである(2011年の回答をまとめた設樂(2012.7)に詳述<sup>3)</sup>).

## (2) 初期の読書傾向

問3-1の回答内容から、就学前の読書傾向について、読書の魅力となった要因別に具体例をまとめたものが次ページの表1である(回答の全数は125名)。

表の1)に挙げるように、色使いに注目したものが多く、多色による美しさ(「にじいろのさかな」)や鮮やかさ(「はらぺこあおむし」)を指摘するものが見られた。2)は、登場人物の挿絵が備えるかわいらしさや華やかさといった女の子らしさ(「ティモシーとサラシリーズ」)、ユーモアや素朴な印象からくる子どもらしさ(「のんたんシリーズ」)を指摘するものである。3)食べ物(挿絵)は、それだけでインパクトを備えている。豊富なパン(「からすのパンやさん」)や、香りを想像させる温かい料理(「ぐりとぐら」)、丁寧な調理や家庭の雰囲気がおいしさに直結したような菓子(「しろくまちゃんのほっとけーき」)など、思わず食べたくなるような衝動をもたらすものなのである。ビジュアルとして、細部まで描き込まれた緻密な絵に引き込まれるという4)もあった。まずは、ビジュアルに訴える魅力が大きな要因となっていることがわかる。

ほかには、本そのものに作りこまれた仕掛けによる楽しさがある。絵本の中には、5)のように、読者である子どもが描き込む(色を塗る)ことによって完成するもの(「わたしだけのはらぺこあおむし」)や、絵の配置によって「めぐり」そのものが遊びになるもの(「パパ、お月さまとって!」「いないいないばああそび」)など、様々な趣向を凝らしたものが存在する。また、6)のように、擬音語(「じゃあじゃあびりびり」)やかかけ声(「おおきなかぶ」)の繰り返しによってリズムを生み出すといった、音声による楽しさもある。

ここで注目したいのは、1990年代に発行された、当時、最新の絵本だけでなく、1960年代や1970年代といった、既に30年以上読み継がれている作品も少なくない、という事実である。それらは、子どもの周囲にいる親や保育園の先生が子どものころ親しんだ絵本を、目の前の子どもへ読み聞かせていると考えられる。

表1 絵本の魅力

| 印象に残った点         | 「本の題またはシリーズ名」作者(出版年)出版社                                                                                                     |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1) 色使い          | 「にじいろのさかな」マーカス・フィスター作・絵 谷川俊太郎訳(1995)講談社<br>「はらぺこあおむし」エリック・カール作・絵 もりひさし訳(1976)偕成社                                            |
| 2) 登場人物<br>(挿絵) | 「ティモシーとサラシリーズ」芭蕉みどり作・絵(1989～2007)ポプラ社<br>「のんたんシリーズ」キヨノサチコ作・絵(1976～)偕成社<br>「シンデレラ」「白雪姫」「人魚姫」「親指姫」など(回答から書誌は特定できない)***        |
| 3) 食べ物<br>(挿絵)  | 「からすのパンやさん」かこさとし 文と絵(1973)偕成社<br>「ぐりとぐら」中川季枝子作 山脇百合子絵(1967)福音館書店<br>「しろくまちゃんのほっとけーき」わかやまけん作(1972)こぐま社                       |
| 4) 緻密な絵         | 「14ひきのシリーズ」いわむらかずお作・絵(1983～1997)童心社<br>「ミッケ!シリーズ」ジーン・マルゾーロ作 ウォルター・ウィック絵 糸井重里訳(1992～)小学館                                     |
| 5) 仕掛け          | 「わたしだけのはらぺこあおむし」エリック・カール作・絵 もりひさし訳(1990)偕成社<br>「パパ、お月さまとって!」エリック・カール作・絵 もりひさし訳(1986)偕成社<br>「いないいないばああそび」きむらゆういち作・絵(1988)偕成社 |
| 6) 音声           | 「じゃあじゃあびりびり」まついのりこ作・絵(1983)偕成社<br>「おおきなかぶ」A・トルストイ作 佐藤忠良絵(1966)福音館書店                                                         |

\*\*\*「シンデレラ」ほか、ドレスを着た「お姫様」が登場する本の人気は高い。これらはディズニー・アニメを元にしたものや、絵本画家の挿絵によるものなど同じ題名で様々な絵本が出版されている。回答は題名だけだったため、書誌を特定できなかった。



### (3) 就学後の読書傾向

小学校入学後は、家族に買ってもらった本や家にあった本だけでなく、教科書や学級文庫、図書館など、学校や学外でも図書に接することとなる。この小学校低学年での読書傾向は、絵や仕掛けによって親しみやすさがあつた絵本だけでなく、物語やシリーズものの文庫本などが持つ、文章が生み出す魅力を備えたもの、そして教科を通じての出会いのものも含まれてくる。問3-2の回答内容を表2にまとめた(回答の全数は125名)。

まず人気が高い物語として、1)に示す冒険ファンタジーやシリーズものなどがある。これらは、一場面の把握だけで楽しめる絵本に比べ、展開を追って長く読み進めるなかで面白さが味わえる。シリーズ化しているものが好まれ、それらの全てを読むという回答がある一方で、シリーズのなかでお気に入りの数冊を何度も読むという回答もあった。「かいけつゾロリ」は挿絵が多く、マンガのように楽しめる要素を持つ。しかし、自己投影しやすい主人公や、身近にいたら楽しいのにと思わせる登場人物(擬人化された動物を含む)は、マンガ(絵)であれ物語(文章)であれ、容姿ではなく、状況を切り開く行動や物事に当たる際の考え方など、筋に即して読解することでその魅力を発揮する。

表2 図書の魅力

| 印象に残った点        | 「本の題またはシリーズ名」作者(出版年)出版社                                                                                                                                                   |
|----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1) 展開や登場人物(文章) | 「かいけつゾロリ」原ゆたか作・絵 (1987～)ポプラ社<br>「エルマーのぼうけん」「エルマーとりゅう」「エルマーと16ぴきのりゅう」ルース・スタイルス・ガネット作 ルース・クリスマン・ガネット絵 渡辺茂男訳(1963～1965)福音館書店<br>「ハリーポッターシリーズ」J.K. ローリング作 松岡佑子訳(1999～2008)静山社 |
| 2) 教科(国語)      | 「おてがみ」「ふたりはともだち」アーノルド・ローベル作・絵 三木卓訳(1987)文化出版局<br>「スイミー 小さなかしこいさかなのはなし」レオ・レオニ作・絵 谷川俊太郎訳(1986)好学社                                                                           |
| 3) 料理          | 「わかったさんのおかしシリーズ」寺村輝夫作 永井郁子絵(1987～1991)あかね書房<br>「おはなしりょうりきょうしつ」(こまったさんシリーズ)寺村輝夫作 岡本颯子絵(1982～1990)あかね書房                                                                     |
| 4) ノンフィクション    | 「シートン動物記」「ファール昆虫記」(回答から書誌は特定できない)                                                                                                                                         |
| 5) 交友(絵)       | 「ウォーリーをさがせ!」マーティン・ハンドフォード作・絵 唐沢則幸訳(1997～2010)フレーベル館<br>「ミッケ!シリーズ」ジーン・マルゾーロ作 ウォルター・ウィック絵 糸井重里訳(1992～)小学館                                                                   |
| 6) シリーズもの      | 「かいけつゾロリ」「エルマーのぼうけん」「ハリーポッター」「わかったさん」「こまったさん」「ファール昆虫記」(上段との重複を避け、シリーズ名のみ記す)                                                                                               |

秋田(1997)では、「3歳頃から」という早い時期に「話の筋の展開への注目」や「本への身体的関わりから言葉での関わりへ」「閉じられた現実と離れた世界での多様な楽しみ方へ」とある。「筋」に注目すること、「離れた世界」で楽しむことが、研究者である秋田(1997)の鋭い洞察によってではなく、自己の内省によって気付くのは「3歳頃」よりずっと後で、やや遅れて意識にのぼったのかもしれない。

第二に、学校教育のなかで教科として印象的な本に出会うこともある。教科教育のほかにも、朝の読書の時間(後述)にたまたま読んだ学級文庫、読書感想文を書くために読んだ推薦図書などがあつた。学校教育を読書経験から見れば、先生から読書の価値付け(意義)が与えられると考えられる。秋田(1997)の述べる「児童期・思春期」でも、「多様な意義の理解へ」「主題の具体的理解から抽象的一般的理解へ」とあり、この時期に読書の意義を各自で形成していくことが指摘されている<sup>2)</sup>。

被調査者が全員、女性であったために回答が集中した本には、3)に挙げた、物語のなかで菓子作りや料理を紹介するシリーズがある。「自分と似ている」女の子が登場し、「女の子の間で流行っていた」、「女の子らしい物語」<sup>4)</sup>なのである。被調査者が全員、人文系の学科に所属するために回答が少なかったと

思われる本は、4)ノンフィクションであるが、友だちと共有しにくい分野だったのかもしれない。一方で、交友を理由に選択された図書もある。5)に挙げた絵本は、指定されたものを見開きいっぱい描かれた絵の中から探し出すというゲーム性の強いもので、「友だちと競争して盛り上がった」「クラスで流行していた」<sup>4)</sup>など、図書を選択する動機として友だちとの関わりを指摘していた。

また、シリーズものだから読むという回答が多かった図書を6)にまとめた。これらは、「続きを追いかけて読む楽しさ」がある、読んでいくうちに「はまって」しまう、「入り込んで読」<sup>4)</sup>むなど、物語を想像してその世界に自己を没入させ、豊かな発想を培いながら嗜好を確立させていく様子がうかがえた。

#### (4) 成長に伴う読書環境の変化

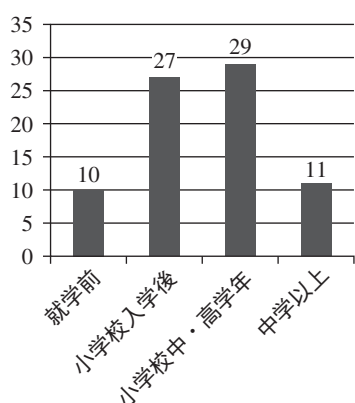


図2 図書館あるいは図書室を意識するようになった年齢の分布

まとめると、図書を意識するようになるのは就学前であり、そのころの読書傾向は就学後に大きく変化することがわかった。そこで、この時期の読書環境や子どもの内面についても回答を元に確認しておく。

就学前、幼児が手に取れる図書がある場所は、自宅(うち)や幼稚園、図書館で、本屋は存在しない。図書の選択は、保護者や保育園・幼稚園の先生などが行い、この時点で図書は大人とともに存在するものだと考えられる。この点は、「(2)初期の読書傾向」で見たように、人気のある絵本には、親や幼稚園の先生が幼少期に発行されている絵本が複数、含まれていたことも傍証になるだろう。

就学後、児童が入手可能な図書は、(本屋に行って)買ってもらものもあれば、学校の学級文庫や図書室にあるもの、教科書などが含まれ、選択の幅が広がる。ここで学級文庫とは、教室内で自由に手に取れる本棚であり、配架されている本については、クラス内の人気がわかる。みんなが読んでいる本だから自分も読んでおこう、ということがあるだろう。図書室は、教室外であるものの、調べ学習や友人と遊ぶために利用する場所となって、子どもの行動範囲が広がるにつれて、意識されるようになる場所である。図2で、図書館あるいは図書室を意識するようになった年齢の分布を示す(回答2より作成、回答の全数は77名)。これによれば、入学後すぐに図書室(図書館)を意識するようになる児童ばかりではないことがわかる。そして、就学後と回答した67名の中には、調べ学習をしたり友だちと遊んだりするなかで図書館・図書室を意識するようになった、中学生・高校生・大学生になってテスト勉強や時間を持って余しているときに一人になれる環境として図書館・図書室を意識するようになったという回答が見られた。

就学を通じ、学習、流行、交友関係など、様々なものが子どもの内面に影響を与える。生活圏は家庭から学校へ広がり、学力の発達が一人で読むことや黙読を可能にし、精神的な発達も加わって交友関係を意識したりあえて一人である環境を求めたりするようになる。こうした児童の成長が、読書傾向の大きな変化につながっていることが確認された。

### 3. 児童サービス

次に、学生が理想とする児童サービスについて述べる。ここで資料とする問4の回答は、学習や個別の職業の魅力を紹介するために推薦する図書と推薦理由で、問5の回答は、学生から見た児童についてである(回答の全数は125名)。

問4-1と問4-2の回答をまとめると、学習面ではおもに国語や社会に関して役立つという(図3と図4を参照、なお各教科は複数回答で集計)。回答者がほぼ日本語日本文学専攻の学生であるので、自身の興味や関心が向く分野(国語や社会、社会の中では特に歴史)に回答が集中したものと考えられる。ただし、自己に限定しない一般論として推定(図3)では国語に集中するのに、経験(図4)では伝記や歴史

## 幼少期の読書とその効果

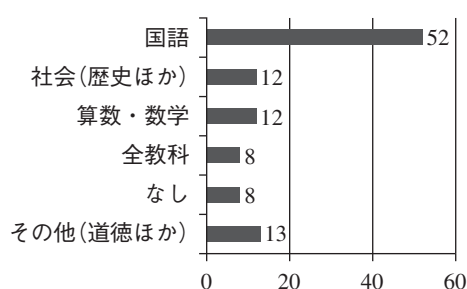


図3 読書が役立つ教科(推定)

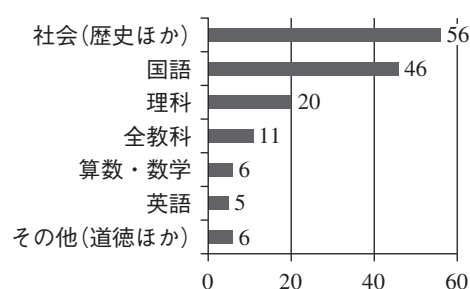


図4 読書が役立つ教科(経験)

小説を踏まえた回答として社会が最多で、自己の嗜好と一般論を区別しようとしているようだ。これは、嗜好に合った図書を読み、それが学習にも役立つということであり、例えば、物語として読むことで社会(特に歴史)がわかりやすくなる、一度読んだ物語や小説が国語で取り上げられて読解がしやすくなる、マンガの伝記や語彙集(ことわざや四字熟語などを集めたもの)を読むと覚えやすいといった内容の回答があった。読書が予習となり、未習事項の導入を果たしていたと考えられる。なお、教科ではないが、学校教育として「朝の読書」\*\*\*の時間があることで、授業への取り組みに役立ったとする回答が複数あった。読書の姿勢は、教科書を読む姿勢につながるのだろう、現在の学校教育のような一斉学習を開始する直前に行くことは有効であることが確かめられた。

職業紹介に関し、問4-3と問4-4の回答を表3にまとめた。この表では、当該の職業をしている人物を元に書かれたものや、当該の職業をしている人物が作者として自分自身の職場を書いたものを「実話」、当該の職業に就いている登場人物を含む物語やマンガなどを「フィクション」、職業の実務を見せる図鑑や実務遂行に直接、必要となる知識が説明されたテキストなどを「実務」として集計した結果である。実話とフィクションが多く、実務は少数であった。つまり、学生が推薦する図書として、職業実態を正確に伝えようとするものよりも、まずは読む楽しさを備えたものが重視されている。読む楽しさを備えたものとは、感動的な物語や娯楽性が強い小説、そしてマンガである。

表3 推薦する図書の魅力

| 種類             | 「本の題」作者(出版年)出版社                                                                        |
|----------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 1) 実話(71本)     | 「おんちゃんは車いす司書」梅田俊作 作・絵(2006)岩崎書店<br>「くまのこうちょうせんせい」こんのひとみ作・いもとようこ絵(2004)金の星社             |
| 2) フィクション(67本) | 「図書館戦争」有川浩(2011)角川書店<br>「ごくせん」森本梢子(2000)集英社                                            |
| 3) 実務(31本)     | 「ただいまお仕事中」越智登代子 作 秋山とも子絵(1999)福音館書店<br>「おしごと図鑑7 はばたけ!先生」くさばよしみ著 なかさこかずひこ!画(2005)フレーベル館 |

この結果を生み出す背景として、問5の回答に数多く見られた言葉がある。それは「本離れ」である。活字離れ、本を読まなくなった子どもたち、本よりもゲームを楽しんだりインターネットで調べたりするといった児童に対し、まずは本を読む楽しさを知ってもらいたい、と思っているのである。

児童サービスにおいて図書を推薦する際には、サービスの対象者として本に親しんでいない児童を含めて考え、本(物語や小説)を読む楽しさやビジュアルに訴えるわかりやすさを備えた図書を提供しよう、と意識しているのであった。

\*\*\*朝、授業開始前に毎朝10分、読書をする時間。1988年から始まり、回答者が中学生・高校生だった平成19年には全国の小・中・高で24,800校、63.18%の実施率という記録がある(林公(2007)<sup>7)</sup>。平成24年7月31日現在では、27,420校となっている(朝の読書推進協議会 推奨ホームページ<sup>8)</sup>より)。

## 4. 読書の効果

### (1) 図書の魅力を感じる力

回答を通じて改めて、読書が楽しい、本が好きだ、と感じる学生が多数、存在することが確かめられた。彼女らには、幼少期の読書体験が楽しかったり、就学後の読書体験で本に「はまる」という経験があったりする。絵本の読み聞かせや陶酔できる本との出会いによって、「本好き」が形成されていくのだと考えられる。

### (2) 図書から学ぶ力

読書体験が学習に役立ったと感じている学生が多かったことも、今回の調査が明らかにしたことの一つである。それは、改めて学習のために(意識的に)読んだからではなく、日頃の楽しみ(個人の嗜好)や学校での習慣形成(一斉学習や朝の読書)によって読書が日常化し、そのなかで得た知識が学習にも活用された、というものであった。つまり、「学習のための読書」ではない。読書が学力に直結するというより、読書を楽しむことで結果的に学ぶ力となる、ということである。読書を通じて、その楽しみと図書から学ぶ力の相乗効果を実感するとき、「読書が学習に役立つ」と言えよう。

### (3) 図書の魅力を伝える力

本好きの学生にとって、児童サービスという司書の仕事では、まず本を読む楽しさを伝えることで、図書や図書館に親しんでもらいたい、と考える傾向が見られた。これは、鮮やかな色使いや挿絵による絵本の魅力から読書を始めた記憶に対し、筋に即して読解する物語やマンガ・小説の魅力を伝えようとしている点で、少々違和感を残す結果となった。ただしこの点は、調査の質問項目で、推薦図書の提示を求めていることが影響し、絵本を読む時期を過ぎた子どもたちへのサービスを想定して回答したとも考えられ、調査方法に課題を残すものとなった。

## 引用文献

- 1) 西田晋, 研究紀要, 京都市総合教育センター研究課(533) p.1 (1998)
- 2) 秋田喜代美, 読書の発達過程, 風間書房, 東京(1997)
- 3) 設樂馨, 言語と交流(15), 85-96 (2012)
- 4) 「 」内の引用部分は問3の回答
- 5) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/gakugei/shisyo/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/index.htm)
- 6) これからの図書館の在り方検討協力者会議, 司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について, pp.14-15 (2009)
- 7) 林公, 朝の読書その理念と実践, リベルタ出版, 東京, p.3 (2007)
- 8) <http://www.mediapal.co.jp/asadoku/>